

令和 8 年度島根県立大学人間文化学部

学校推薦型・総合型選抜 社会人・学士 帰国生 私費外国人留学生特別選抜

地域文化学科 小論文問題

【問題】 次の①と②の 2 つの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

①以下の文章は、インド系ロンドン生まれのアメリカ育ちで英語をふだん使用している著者が「なぜイタリア語で書くのか」という問いに対して、その回答として比喩を用いて答えている文章の一部である。

では、第二のメタファー^{注1)}の話に移ろう。やはりラッパ・ロマーノ^{注2)}のおかげで思いついたのだが、これは彼女の第一作ではなく、最後の作品からである。その *Diario ultimo* (最後の日記) は、晩年に書かれた随想、回想をまとめて、死後に出版された。もう失明に近づいていた著者が、大判の白紙に、ほとんど判読しがたい筆跡で書き込んだという。そのように書かれた本があることも、また彼女の失明についても、私はまったく知らなかったが、著者が住んでいたミラノの家で、アントニオ・リア^{注3)}からのご恵贈にあずかった。ロマーノがいた居間に坐って、その蔵書、絵画に囲まれた私は、彼女が視力を失いそうになりながら、なお一冊を書き上げたと知って、また彼女に近づいたような気がした。

細やかな断章というべき性質の作品が、一つの強力な証言になっている。言葉によって自己を表現し確認するという作業はどれだけ必要なことなのか、そして境界線を越えたい欲求はどれだけ抑えがたいのか、しっかりと語ってくれるのだ。もう目の見えなくなりそうなロマーノが、かえって宝石のように透明な文章を書いている。視力は衰弱するとしても、その観察眼は精緻な光を失わない。

新しい言語で書こうとすれば失明するのも同然であることは、とうに私にもわかっていた。書くというのは、すなわち世界を見てとって思い描くことであるからだ。いまの私はイタリア語でものが見えるようになっているが、もちろん視力は不十分だ。まだ薄暗がりて手さぐりしている。私もまた、おぼつかない手で書いている。

だが、ロマーノの最後の作品からは、見えないことが新しい展望をもたらすのだと気づかされる。それまでの私は、イタリア語が不自由であることを、読者にも私自身にも、どこかで弁解したくなっていた。ところがロマーノに目を開かされた。

「ほとんど見えない＝一つの視点」

なるほど、そう考えればよいのだ。私がイタリア語で書こうとして、その釈明をしなければならないように思ってから、ずっと求めていた答えがここにあった。まるで公式か定理のような簡潔な言い方が、私の胸にすくと落ちて、よいことを教わったと思える。すべてがくっきり見えなくても、それで世界に違った光が射すこともあるのだった。もどかしいようできて、案外、ものごとの本質に迫るのかもしれない。

さらにロマーノは、「見えないことは考えることを妨げず、むしろ刺激になる」と言う。これにも同感だ。また私にも「書くものが見えていない」。いまでも私は、『べつの言葉で』にも書いたとおりで、自分がイタリア語で書いた文章を評価しきれない。つまり書いた結果がよく見えない。それでいて見えないからこそ油断なく鋭敏になっている。もちろん自然に身についたのではなく、すべて苦労と引き換えだ。ロマーノは「余白には可能性がある」と書く。これも私にはよくわかる。

ただ、逆のことを言えば、英語であっても私には見えないものがある。見えすぎて見えないのだ。ある言語に習熟して、器用に、容易に、使えているとしたら、そういうことになりかねない。つい安心して、受け身になり、怠けたりもする。英語で書いていると、イタリア語のような緊張がない。ほとんど一語ごとに調べて、調べ直す、という手間をかけずに書けてしまう。

もちろん、はっきり区別しておけば、ロマーノは実際に視力を失ったのであって、私の場合は比喩にとどまる。あくまで創作上の戦略、利便として言っている。彼女の視覚障害は悪化する一方だったのだが、私は時間と

ともに経験を積んで、だんだん見えるようになってきた。

私は、まずイタリア語で書こうとして、視力が限られていることを隠すまでもないと思った。無難に仕上げた文章で、ありもしない視力があるように見せかけたくはなかった。そうしたいなら、ずっと英語で書いていればよかったのだ。たどたどしいイタリア語に、いらだつ読者がいることはわかっていた。十分に使いこなせない言語でものを言うのだから、聞いていてじれったくもなるだろう。では、なぜイタリア語なのか――。もう一組の目を発達させるため、いまだ弱いところで実験をするため、である。

注 1) 比喩のこと

注 2) イタリアの女性作家

注 3) ロマーノの 2 度目の夫

出典：ジュンバ・ラヒリ『翻訳する私』（小川高義 訳）新潮社、2025

ジュンバ・ラヒリ著、小川高義訳『翻訳する私』（新潮社刊）

“Used with permission of Princeton University Press, from [Work’s title, author, volume, edition number and year of copyright];

permission conveyed through Copyright Clearance Center, Inc.”

②数年前の夏、イタリアの小さな街で仕事をしたあとに、パフォーマー仲間何人かと観光をすることになりました。初日はフィレンツェで大聖堂や美術館を満喫。次の日はレンタカーを借りてチンクエッレという海辺の街までドライブです。高速道路を走るクルマの窓から外を見ると、遠くにアルプスの雄大な山並みが見えます。不思議だったのはその山頂が真っ白に輝いていたことです。

「さすが、高い山の上は夏でも雪が積もっているんですね」

僕の何気ないつぶやきに、同乗者の 1 人がこう返しました。

「あれは雪ではなくて大理石なんですよ。アルプスの造山活動によってこの辺りはいい大理石がたくさんとれるんです」

ああ、それは高校の地学の授業で習ったことがある。アルプス山脈というのはアフリカとユーラシアの 2 つのプレートがぶつかり合うことでできたもの。そして大理石というのは石灰岩が高い熱や圧力で変性してできたものだったっけ。おぼろげな記憶を頭の奥から引っ張り出していたときに、別の人がこうつなげたのです。

「そうか、だからフィレンツェは芸術の街になったのかもしれないですね」

僕はその言葉に心底はっとしたのです。

確かにそうだ。昨日見てきた大聖堂も数々の工芸品も、すべて美しい大理石でできていた。それは決して偶然じゃない。ここが、プレートがぶつかる場所であったから、ここで良質な大理石がとれたから、ここに職人や美術家が集まったから。規模感も時代感も違うバラバラの情報が、まるでよくできた謎解きのように 1 つの線につながって、その瞬間、世界の明度が一段階増したような、なんともいえない感動を覚えたのです。

出典：池田洋介『日常の見え方がちょっと変わる ゆる数学思考』朝日新聞出版、2024

問 1. 下線部の「もう一組の目を発達させるため、いまだ弱いところで実験をするため」とは、どのようなことを意味しているのか、150 字以内で説明せよ。

問 2. 先の二つの文章を読んで、「学ぶ」とはどのようなことで、何を大切にすべきと考えられるか、800 字以内で、例をあげながら自分の意見を述べよ。論じる際には、必ず上記二つの文章を取りあげること。